

■ 編集だより

編集後記

本誌1月号のPCNだよりに詳しく紹介されているように、このたび Psychiatry and Clinical Neuroscience 誌が日本精神神経学会の英文機関誌となった。またこれを契機に、それまでの赤が基調の表紙から青が基調の表紙となった。なかなかさわやかなすっきりしたデザインだと思う。わが国の精神医学の知見を海外に発信し続けたPCNだが、最近では海外からの評価も高くなった。歴史あるPCNが再び学会誌として戻ってきたことは本学会にとっても大変喜ばしいことである。会員にとって英文誌が身近になり、自らの研究成果を英文にして投稿しようという意欲が更にかき立てられことが期待される。投稿方法も on-line による投稿となり便利になった。

思えばその昔「神経病理の論文は写真が命。本文を読まなくても結論がわかるような写真を撮るように」と厳しい先輩から指導され、何本ものフィルムを使って顕微鏡写真を撮影したことを思い出す。デジタルファイルでの投稿が広まってきても、しばらくは画質にこだわり紙原稿で投稿できる雑誌を探したものである。ところがその後デジカメの性能が格段に進歩したことも大きい。今では作成したデジタルファイルを on-line で投稿する便利さをすっかり享受している。時代の流れを感じさせる。

しかし精神神経誌は未だに紙原稿での投稿である。編集委員会では毎回活発な議論が繰り広げられている。投稿された1つ1つの論文を編集委員が丹念に読みこなし、さらに各委員から様々な視点からの意見が加えられ、論文の良さが磨かれていく。このような厳しい中にも暖かみのある本誌の査読スタイルは、紙原稿だからこそ生まれる手作りの雰囲気醸し出している。本誌には紙原稿の投稿スタイルがあると思う。これからも本誌は読者や時代のニーズに答える内容を提供するよう発展を続けるが、本誌の良さを保ち続けることも必要であろう。

最近の精神神経誌の編集委員会では、PCNをどのように盛り立てていくか、しばしば議題に上る。そして精神神経誌に、PCNに掲載された論文の紹介が開始されるようになった。精神神経誌とPCNがそれぞれの良さを発揮しながら今後ますます発展することを望む。

水上勝義